序

二千余年前、インド東北の一地域に発祥した佛教は、阿育王時代には本土全域はもとより、南はスリランカ、西北はカシミールにまで拡がり、南伝した佛教は更に東南アジア諸國に、北伝したそれはシルク、ロード諸國を経て中國に、そして韓國・日本にと伸展した。しかし長年月に渉る時の流れとともに、遺跡は多く殘つているとは言うものの、インド本土、シルク・ロード諸國、中國などでは、その影は稀薄となり、南伝したそれも、スリランカ、その地、二、三の國々を除いては、既に形骸さ殘すのみとなりつつある。勿論、欧米諸國でも言語学的研究は盛行し、また近年では禪その他も伝承さふてはいるが、それらの多くは、珍らしい東洋的思惟として缺迎されているとはいえ、これを佛教学研究の一助として受容したものとは言い難い。

このたび『韓國佛教学ゼミナール』が再刊されるということを全宗釈師から拝聴した。うけたまわれば曽て日本に留学された韓國の方々、また在日されている諸師による諸論文が年度毎に集大成されるとの由である。韓國の佛教が現在もなお脈々として息づいている證左として、誠に心嬉しい限りで、慶賀に堪えない。

ところが、全宗釈師の言によれば、私にその『序』を書けと言う。この方面の研究では、現在、鎌田茂雄・木村清孝両博士を筆頭に、多くの諸士によつて該博にして精緻な研究が既に多く結実しており、適任者としては此の両博士に委頼するのが妥當であるとの私の提言は、全師の重ねての言葉によつて遮断された。両博士とも、この壮擧に心から賛意を示され、既に浩瀚な論文原稿を頂戴しているとのことである。私はしばらく沈思せざるを得なかった。

考えてみれば私も、依嘱されたものであったとはいえ、曽て『三國遺事』や『海東高僧傳』を邦語譯して『國譯一

切経』の中に収めさせて頂いたことがあり、その因縁で韓國の佛寺に參詣したこともある。全く無縁というれけではない。両碩学その他の方々には誠に申しれけない仕儀ではあるが、それぞれ御寛恕を得て、佛縁の有難さを肝に銘じつつ、経緯を粗述し、おこがましくも刊行の『序』とさせて頂くことをお許しいただければ、幸甚これに遇ぎたるものはない。

一九八五年　十一月

立正大学教授
文学博士　野村耀昌　識す

新羅華厳の思想史的意義

鎌田茂雄

一、序

あをによし寧楽(なら)の京師(みやこ)は咲く花の
　匂ふが如く、いま盛りなり

とうたわれた奈良時代は、仏教文化によってはなやかに飾られた時代であった。この絢爛たる仏教文化のシンボルとなったのが、とりもなおさず東大寺の大仏であった。

東大寺の大仏は、聖武天皇の発願によって建立されたものである。そしてこの大仏を造るとき、その思想のよりどころとなったのは、まさしく『華厳經』の教えであった。

『華厳経』を初めて日本に伝えたのは、唐の道璿(七〇二―七六〇)であった。それは七三六年のことであった。道璿が唐から日本に将来した『華厳経』を最初に講義したのは、新羅の人といわれる審祥(?―七四二)であった。聖武天皇は審祥を東大寺の金鐘道場に招いて『華厳経』を講じさせた。この時、奈良の空には紫色の瑞雲がたなびいて、若草山を覆ったという。聖武天皇は深く感嘆され、たくさんの布地を賜ったのであった。

聖武天皇のこの感激が『華厳経』のシンボルとして大仏を建立しようという志しとなり、ついに大仏が造営されるに至った。天平勝宝四年(七五二)四月九日、聖武天皇は大仏殿に行幸され、インドからはるばる東海の島に渡